

氏名(本籍)	山 <sup>やま</sup> 下 <sup>した</sup> 王 <sup>きみ</sup> 世 <sup>よ</sup> (東京都)		
学位の種類	博士(デザイン学)		
学位記番号	博甲第2,194号		
学位授与年月日	平成11年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	初期オスマン・トルコ建築におけるドーム架構の形成と発展		
主査	筑波大学助教授	工学博士	日高健一郎
副査	筑波大学教授	工学博士	富江伸治
副査	筑波大学教授	文学博士	相馬隆
副査	大同工業大学教授	工学博士	佐藤達生
副査	愛知淑徳大学教授	工学修士	河辺泰宏

## 論文の内容の要旨

本論文は、15世紀のオスマン・トルコ建築を主対象として、その最も主要な類型であるモスクの空間構成の歴史と意義を、ドームの架構形式に注目して分析し、体型化した労作である。狭義の初期オスマン・トルコ建築に留まらず、広くトルコ系モスク建築をも考察対象に含め、文献研究と現況調査の両面で精力的かつ総合的に展開された研究成果となっている。

第1章「オスマン・トルコ建築をめぐる歴史的背景」では、著者はまず、これまで西欧系とトルコ国内に分かれて、それぞれやや偏った方向で進んできたオスマン・トルコ建築研究史を生理・分類し、既往研究の問題点を指摘する。特にビザンティン建築とオスマン・トルコ建築の関係については、これら両系統の研究がともに総合性を欠き、オスマン・トルコ建築のドーム架構の空間的、建築的理解が不十分であったとされる。本章の後半では、次章以降の導入部として、「トルコ系」という総称の定義を含め、中央アジア諸民族の移動とトルコ系国家の成立が論じられる。

第2章「小アジア半島におけるオスマン・トルコ以前のトルコ系建築」では、前半でルム・セルチュック朝崩壊前および後のトルコ系諸王朝・候国の建築、後半でオスマン・トルコ以前のドーム構造の系譜と空間構成の変化が扱われる。オスマン・トルコ以前のトルコ系諸建築に関する体系的記述は国内外になく、ここでは、格子平面の類型とドーム架構という視点から、特にルム・セルチュック朝とアルトゥク朝を中心にきわめて多くの作例が紹介されている点で興味深い。本章までの考察で、小アジア半島におけるトルコ系モスクの平面類型が単一ドーム形式とエイヴァン形式に分かれ、後のオスマン・トルコ建築にとって重要な前者は、さらに三類型(単独の正方形礼拝空間にドームを架構、ミフラップ前にドームを架構し周囲に列柱を配置、ピアで支持されたドーム架構)に分類できることが論じられる。

第3章「ドーム構造の確立に向けて」では、前章後半で類型化した単一ドーム形式が初期オスマン・トルコ建築で発展し、ドームの複数化によって、新たにドーム連結形式とヒュトゥーヴェット・モスク形式が生まれた経緯が、明らかにされる。後者は、神秘主義教団の修煉場を兼ねたモスクで、逆T形の平面構成を特徴とする。イズニキ、ブルサ、エディルネ各地のモスクの分析を通じて、ヒュトゥーヴェット・モスク形式が壁体によるドーム支持の伝統を固守した一方、小アジア固有のドーム連結形式では、後の発展につながるピアの導入が促進されたという結論を得ている。

第4章「オスマン・トルコ建築におけるピアおよび円柱の意味」は本論文全体の結論をなす。コンスタンティ

ノポリスの征服によってオスマン・トルコ建築が大きく変貌し、大規模ドーム架構を特徴とする盛期オスマン・トルコ建築への空間的、技術的基盤が整えられたという著者の主張が、エスキ・ファーティフ・モスクの復元的考察（前半）と征服によるビザンティン建築からの影響（後半）という二つの論点から立証される。ビザンティン時代の聖使徒聖堂を壊して建設されたエスキ・ファーティフ・モスクの復元は、オスマン・トルコ建築史にとつのみならず、ビザンティン建築史にとつても大きな課題であるが、著者は、寸法およびドームの縦横比（ドーム頂高と径の比）から、既往の復元案の矛盾点を指摘している。著者固有の復元案の提示には至っていないが、指摘された矛盾点は今後の復元案提示の基礎となるもので、現地調査を含めた今後の展開が期待される。

一方、ビザンティン建築とオスマン・トルコ建築の関係は、従来ハギア・ソフィア大聖堂の後者への影響として、半ドームの登場・導入のみが単純に扱われてきたが、著者は中小規模の教会堂におけるドーム架構とピアの効果的配置にも注目し、中小教会堂のモスクへの転用を通じてオスマン・トルコ建築に新たな可能性が生まれたと主張する。コンスタンティノポリス征服を契機として大きく変容するオスマン・トルコ建築の発展にとって、ビザンティン建築の影響が多様な形で進行したという実証的指摘は、別個の研究領域として分断されていたビザンティンとオスマン・トルコの建築史にとってきわめて意義深い。

## 審査の結果の要旨

多くの作例を現地で目視調査し、資料による情報と現地観察による詳細を総合化した労作である。従来、中央アジアから小アジアに至るいわゆるトルコ系建築の系譜については、信頼に足る通史がなく、本論文前半で邦文文献として初めて、トルコ系建築の系譜が整理された意義は大きい。ルム・セルチュック朝の神学校建築とオスマン・トルコの建築の関係に留まっていた既往研究の枠を越え、ドーム架構という線でオスマン・トルコの建築とそれ以前の多様なトルコ系諸国の建築が結ばれるという論旨には説得力がある。ただ、諸侯国のモスク建築系譜の記述にあたっては、論文後半で展開されるビザンティン建築とオスマン・トルコの建築の関係に関わる前提として網羅的な解説をするという意図が意識され過ぎたため、説明が幾分冗長になる嫌いがあるとの指摘が査読者からなされた。また、統括的記述の陰に隠れて、部分的に著者の独創性が幾分か分かりにくい点があり、質疑応答が行われた。

既往研究でいわば空白域となっていたビザンティン建築とオスマン・トルコの建築の影響関係を主題とし、ドーム架構という具体的視点から考察を進めた本論文は、特にオスマン・トルコ建築史学にとって大きな貢献をなすと判断される。イスラム建築史の中でもやや特殊な領域であるオスマン・トルコ建築史は、トルコ人研究者とヨーロッパ系研究者がそれぞれ独自に研究を進めており、トルコ人研究者による研究成果が、先行建築（特にビザンティン建築）および隣接領域の諸建築を含むより広い視野で活用・展開される機会が少なかった。トルコ人研究者が専らトルコ語による論文発表を行い、研究の基本的姿勢がオスマン・トルコ建築の独自性の強調にあったことがその主因である。

長期のトルコ留学の成果を基盤としつつ、一方でトルコ国内の閉塞的学問環境に煩わされることなく隣接諸地域の作例を研究・調査した著者は、トルコ系、ヨーロッパ系両域に多角的に研究を展開し、こうした既往研究の限界を超えうる学力と方法論を獲得していると判断できる。既往の学問的動向に左右されない自由な発想と方法は論文審査の過程でも好評であった。

本論文中、最も注目される成果はエスキ・ファーティフ・モスクの復元に関する論考である。査読者の評価もこの点で一致していた。同モスクの復元案の提示は、アルヴェルディ案で一応の定説を見たと言われていたが、著者は、オスマン・トルコ建築の寸法単位ジラーの算定によって、その復元案の壁厚がドーム規模に比して不十分であり、逆に奥行き方向には余分な間隙を生じるという矛盾を指摘している。初期ビザンティン時代の聖使徒聖堂が破壊されてエスキ・ファーティフ・モスクが建設され、そのエスキ・ファーティフ・モスクが地震で大破し

てイエニ・ファーティフ・モスクが建設されたという複雑な建設史の中で、特にエスキ・ファーティフ・モスクの創建事情と復元は大きな課題であり、なお現存するきわめて僅かな壁面等の詳細調査と実測を含め、画像処理技術等を活用した立体的考察によるイエニ・ファーティフ・モスク復元への取り組みが期待される。

査読者は、本論文の内容、構成、学問的水準を高く評価し、加えて今後の研究の展開に関していくつかの提言を行った。特に、トルコ系建築の起源を探る上で、中央アジア建築の体系的研究が望まれること、また、方法論として、建築構造の架構理論ないし建築技術史と、ドームという象徴的建築空間の空間論的考察をいかに融合させるかが課題であることなどが、助言された。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。